

少子化問題を解決する中医学 不妊～子育てまで

Solution of declining birth rate by TCM

吉富 誠

Makoto Yoshitomi

吉富復陽堂医院, 熊本, 〒 860-0845 熊本市中央区上通町 5-20 上通セントラルハイツ 210 号
Yoshitomi Fukuyodo Iin, 5-20-210, Kamitoricho, Chuo-ku, Kumamoto-shi, Kumamoto, 860-0845, Japan

去年、会頭を仰せつかったとき、なにをテーマにしようかと考えました。いろいろ考えた挙げ句に、「少子化問題を解決する中医学 不妊～子育てまで」というテーマにいたしました。

じつは私は来年還暦を迎えるのですが、私の一人娘は今3歳です。娘の経験から、湯液・鍼灸を含めて中医学は不妊から妊娠・出産・育児まで、非常に役に立つという実感を得たので、このテーマにしようと決めました。

実際に準備を始めてみると、不妊から子育てまでではあまりにも幅が広すぎて、会頭講演をするにもまとまりにくかったと反省していますが、いろいろな演題が出ているのを見て、このテーマでよかったかと思っています。

私は20年前に韓国に留学して、師匠である鮮于基先生から『黄帝内経』にもとづく後世方の医学を教えていただきました。また、韓医学会の重鎮でありました裴元植先生からも臨床のことを習ったのですが、裴先生は不妊治療が非常にお得意でした。今回、裴先生の医院を引き継いだ李鍾安先生がおみえになっていて、明日のシンポジウムで裴先生が得意であった不妊症の臨床の実際を披露していただきます。

私が韓国から帰ってきて公立菊池養生園で勤め始めたころです、12回流産したという人が、「なんとかありませんか」ということで来られました。その方は見るからに疝が強そうな人でした。ただ、本人に聞いてもまったくそういう自覚がなくて、その人のお母さんに聞いてみたら、「小さいころから疝の虫が強くてたいへんでした」とおっしゃるのですね。それで、疏肝を中心とした処方だけを出したら、妊娠してもすぐに流産してしまうという人でしたが、6カ月後に妊娠して、無事に子どもが生まれました。

そのことがきっかけで、しばらく不妊症の方が多く来られるようになって、

おもに裏先生の処方に加減法を使い、6割ぐらいの確率で、妊娠・出産が成功したという経験をもっています。

■ 少子化問題は世界的視点と地域的視点で考える

少子化問題を考えるとき、こういう言葉が浮かんできました。「Think Globally Act Locally」という言葉です。全国に先駆けて、1990年に「アースデイ熊本」が開催されました。それを主導してくれたモンタナ州立大学のクリフ・モンティン先生が教えてくれた言葉です。当時のアメリカの市民運動のスローガンの1つです。ポール・マッカートニーも「Think globally Act locally」という言葉を使っています。地球規模で考えて、地域で活動するということです。

地球規模で考えると、これ以上、地球に人類が増えることは必ずしも望ましいことではないかもしれませんね。ただ、地域的に考えると、急激な少子化という変化は好ましいことではないと思います。女性の立場に立てば「少子化問題を解決するために子どもを産み、育てるのではありません」というご意見もあり、なるほどと思っておりますが、臨床医としては、Globallyな視点を持ちながら、Locallyに目の前に来た患者さんの悩みに向かい合うという立場で考えたいと思っています。

東洋的思考と西洋的思考とがあります(図1)が、西洋的思考では「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」(『旧約聖書』創世記)という考えで、人間中心主義ですが、東洋的思考では人間は自然の一部です。人間以外の動物で、人間が増えるのを喜んでいるのは、ゴキブリとネズミと水虫ぐらいではないかと思えます。東洋では相対的思考を重視していますが、西洋では絶対的善悪の立場で考えています。私たち中医学を生業にする者は、やはり東洋的思考が基本にある必要があると思っています。

東洋的思考と西洋的思考	
東洋的思考	西洋的思考
人間は自然の一部である	人間は万物の霊長である 人間中心主義 「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」旧約聖書 創世記
相対的思考 時と場合によって判断は異なる 因時因地因人	絶対的善悪 物事を善悪で語る絶対的二元論

図1

地球規模で考えると、世界の人口は産業革命以降、うなぎのぼりに増えていきます(図2)。うなぎは、最近減って食べられなくなってきていますが、人口はうなぎのぼりです。しかし、地域の人口を考えると(図3)、平成16年にピークを

迎えた日本の人口は1億2,779万人だったのですが、徐々に減っています(図4)。宮崎県はそのだいぶ前にピークを迎えて緩やかに下がってきています。地球の人口が93億人となる2050年には、日本の人口は1億人を割り込む見込みです。そして高齢化率は39.6%で、2012年の宮崎県の高齢化率23.3%を大きく上回っています。



図2

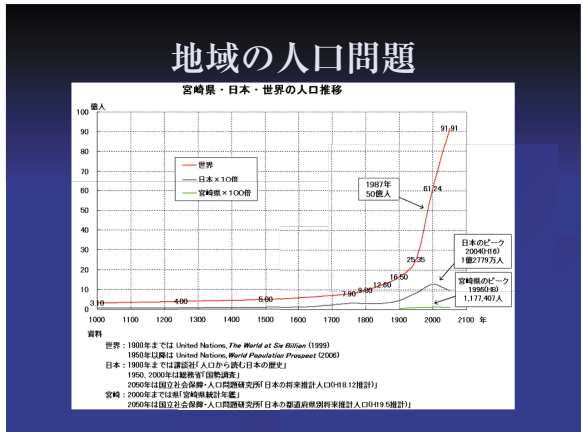


図3

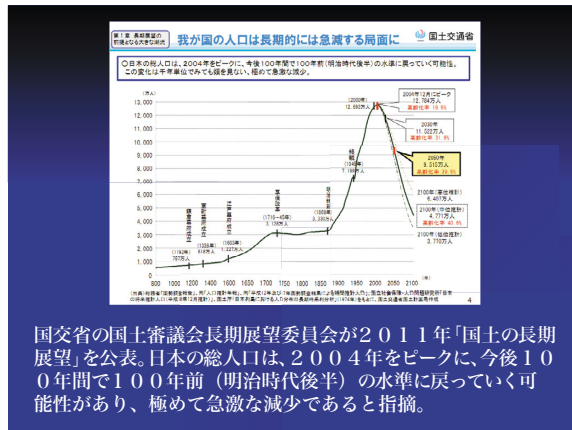


図4

「少子化をくいとめるために中医学はなにができるか」ということですね(図5)。まず不妊症に取り組み、妊娠中のいろいろな問題、出産後の子どもの問題、お母さんの問題を解決することが、中医学としての役割ではないかと思っています。

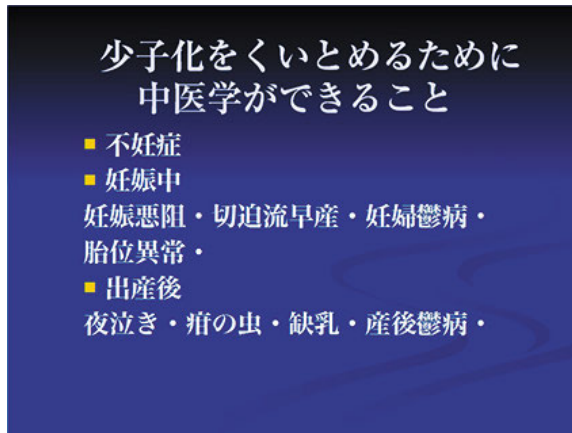


図5

熊本県の宇土市に粟嶋神社という神社があるのですが、そこの春祭りで、日本一小さなミニ鳥居というのがあります(図6)。左が普通の鳥居で、右にあるのが日本一のミニ鳥居です。この小さい鳥居をくぐると、安産や婦人病にご利益があるとして、多くの参拝者が集まります。



図6

また、人吉市の近くに湯前^{ゆのまえ}という地域があるのですが、そこにある湯前潮^{うしお}神社では、「おっぱい祭り」というものがあります(図7)。おっぱいの神様といわれています。おっぱいの形をしたものを奉納すると母乳がよく出るというご利益があるとされていて、多くの方が参加しています。右上は、くまモンも参加して、おっぱい祭りで牛乳を飲んでいるところですね。「おっぱいまシュマロ」(図8)なんていうのも売っています。



図7



図8

中国の産科小児科医学

歴史的に、「漢代以前の産科小児科」(図9)をまとめてみると、『黄帝内経』では上古天真論、これは薬用酒の宣伝でも使われていますが、男女の生殖機能の推移を男性は8、女性は7の倍数で説明するという話ですね。『神農本草経』では「川芎が婦人の血閉無子を主る」とか、『金匱要略』では「温経湯は婦人の小腹の寒久しくして胎を受けざるを主る」という話が出てきたりします。

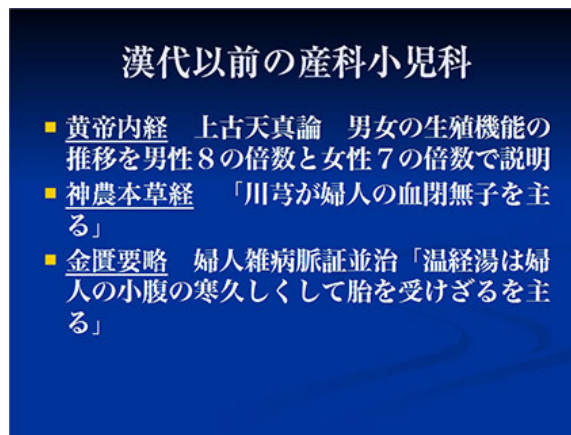


図9

晋から五代まで(図10)になると、まとまった記述が現れるようになります。『鍼灸甲乙経』には不妊症の鍼灸治療について書いてありますし、『諸病源候論』には、不妊症・妊娠から出産・産後の諸症状・男性不妊の病因・小児諸症状についての記載がきめ細かく書かれていて、後世の医書にも多く引用されています。

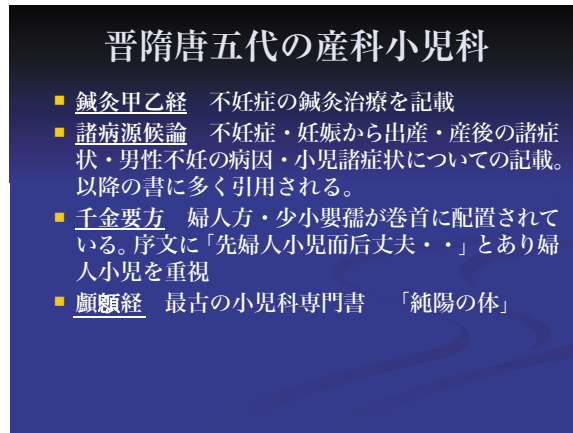


図 10

『千金要方』では、序文に「先婦人小児而后丈夫……」とあり、婦人小児を先として丈夫（大人）を後にまわすということで、婦人と小児を最初に取り上げています。婦人小児を非常に重視したということです。それから、なかなか読みにくい漢字ですが、最古の小児科専門書といわれているのが、『顧願經』というもので、「小児は純陽の体」という概念を打ち出しています。

唐代の医科大学を「太医署」といいますが、そのなかに独立した小児科の部門が設けられています。

『千金方』は、婦人方と嬰兒方に分かれていて、スライドに示すような内容の項目が書かれています（図 11）。

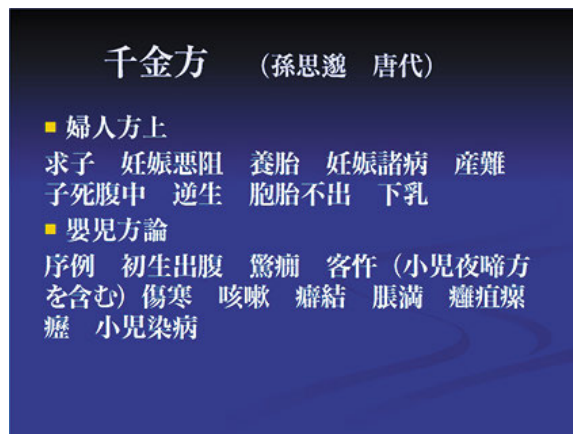


図 11

宋金元代になると（図 12）、特にこの『婦人大全良方』と『小兒藥証直訣』の 2 冊が出て、小児科・婦人科がほぼ確立された時代と言ってもいいのではないかと思います。『婦人大全良方』は、南宋までの産婦人科の集大成で、後世の医家に多大な影響を与えました。内容はスライドに示すとおりです（図 13）。小児科では、錢乙という方が出て、弟子の閻孝忠が錢乙の論述と方剤をまとめて『小兒藥証直訣』を編纂しました（図 14）。特にこの本では小児の特徴として「臟腑柔

弱・易虚易実・易寒易熱」という概念を打ち出しています。治療面では穏やかに潤すことを原則として、六味地黄丸など現在もよく使われている有効な方剤を創製しています。

宋金時代の産科小児科

- 十産論 楊子健 胎位異常の矯正法などを記載
- 婦人大全良方 陳自明 宋以前の産婦人科学の集大成、後世に大きな影響を及ぼす
- 小兒藥証直訣 錢乙 「臟腑柔弱・易虚易実・易寒易熱」六味地黄丸をつくる
小児科学の基礎を築いた

図 12

婦人大全良方

陳自明(1190?-1270)

- 南宋までの産婦人科の集大成で後世の医家に多大な影響を与えた
- 内容 全八門にわかれている
- 婦人科： 調經門 衆疾門 求嗣門
- 産科： 胎教門 妊娠門 坐月門
産難門 産後門

図 13

中医小児科を確立した 錢乙(960～1126)

- 北宋の小児科の名医
- 弟子の閻孝忠が錢乙の論述と方剤をまとめて「小兒藥証直訣」を編纂した。
- 小児の生理的特徴を「臟腑柔弱・易虚易実・易寒易熱」と指摘
- 治療では穏やかに潤すことを原則とした
- 多くの有効な方剤を創製した
- 六味地黄丸 升麻葛根湯 導赤散 異功散

図 14

明代になると（図 15）、『景岳全書』が出てきます。張景岳も晩年に子を得たそうです。不妊の原因を「天時・地利・人事・薬食・疾病」の面から分析しています。『保嬰撮要』は薛鏗・薛己父子によって書かれました。特に母を兼治することを推奨していて、抑肝散の子母同服ということも打ち出しています。

この明代の同じころに、韓国では『東医宝鑑』が出ています。『東医宝鑑』のなかにも婦人小児の項目を設けて、詳細に記述しています。

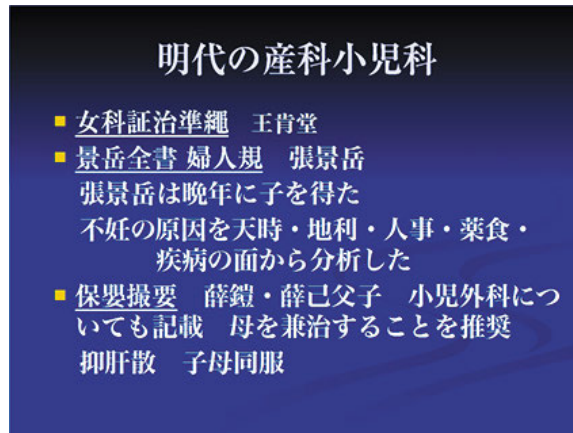


図 15

「清代の産科小児科」(図 16) は、明代までのまとめのような本が多く出ました。『傳青主女科』は臨床応用にすぐれた産婦人科全書になっています。「嫉妬不妊に開鬱種玉湯」と書いてあり興味深いです。

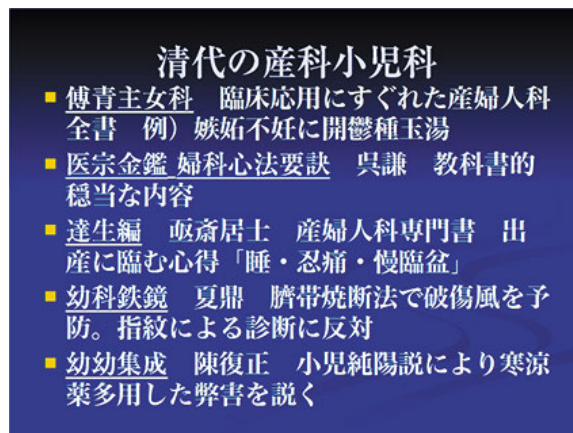


図 16

日本の産科小児科医学

「日本の産科小児科」(図 17) は、『医心方』にも婦人篇と小児篇があります。曲直瀬道三の『啓迪集』のなかにも婦人門・小児門があります。賀川流の『産論』では産科手技が開発されました。香月牛山が『婦人寿草』, 片倉鶴陵が『保嬰須知』『産科發蒙』という本を出しています。

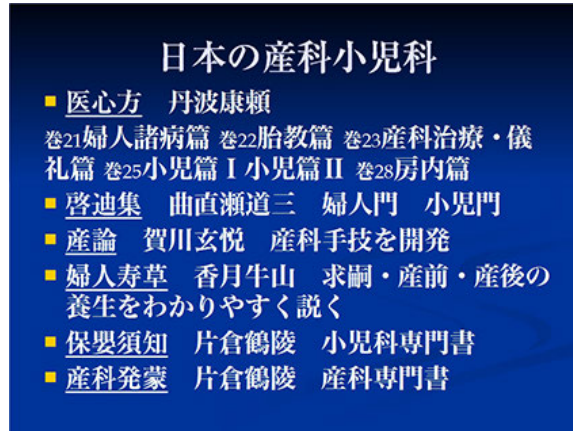


図 17

曲直瀬道三（図 18）には、「朱丹溪がいう。子ができない場合の多くは、父の気の不足に起因している。どうして罪を母の気の虚寒に独り帰すことができようか」と言っており、当時ではどうも温めることばかりに偏っていた部分があったらしいのですが、それを批判したというような記載がありました。小児門は『小児薬証直訣』などを引用しています。

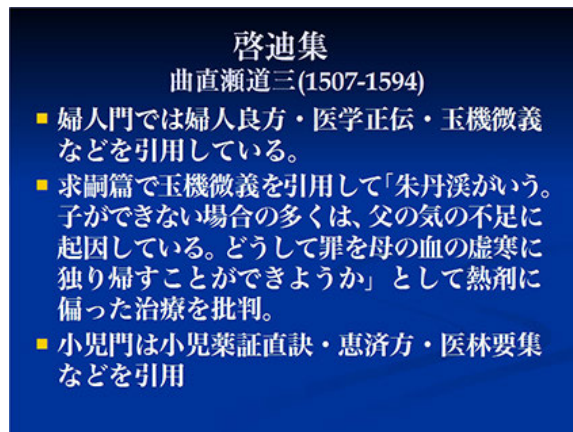


図 18

賀川玄悦（図 19）は、回生術という産科手技を開発しました。回生術は、子どもは助けられないのですけれども母親を助ける方法です。それからもう1つ、世界に先駆けて胎児の正常位置を発見したということで有名です。それまでは、子どもは産まれる直前に頭位になると考えられていたらしいですね。ところが、賀川玄悦は苦勞して医術を修めたので、よく触診していたのではないかと思います。産まれるときに頭が下に向くのではなく、正常の出産では胎児は最初から下を向いていることを発見しました。スコットランドのウィリアム・スメリーがほぼ同時期に同じことを言っているのですが、世界に先駆けて胎児の正常位置を発見したことで有名です。今でも使われている折衝飲は玄悦の代表処方です。

産論 賀川玄悦(1700-1777)

- 彦根の人、30歳過ぎて京に上り独学で医学を修めた。後に産科を専門とし、回生術などの産科手技を開発した。世界に先駆けて胎児の正常位置を発見した。
- 折衝飲は玄悦の代表処方である。







図 19

香月牛山（図 20）は、九州の福岡県の人ですが、福岡の貝原益軒先生から儒学を学びました。江戸中期の後世派の第一人者と称される方です。たくさんの本を出していますが、そのなかの『婦人寿草』（図 21）が有名です。仮名交じりの平易な文章で、一般向けの啓蒙書として書かれていますけれども、中国の古典をたくさん引用していて内容は高度です。内容は不妊症から産後にまで及んでいます。このなかでもおもしろい文章として、「子なき者鬼神にいのるの説」（図 22）というのがあります。子どものない人が神様・仏様にお祈りするの昔から日本でも唐土でもやっていることだけでも、神様に祈るのはただ自分の心が素直になって、人事の及ばないところを神様に委ねるといのが本来なのに、自分の行いは正さずしてやたらと神様・仏様に祈るのはどうだろうかということを言っているわけですね。それをいいことに、神様・仏様のところにいる巫女さんだとかがお金を巻き上げるのもよくない、ということを行っています。今の日本でもある話だと思います。


香月牛山(1656-1740)



筑前遠賀郡出身 貝原益軒から儒学を学び、医を藩医鶴原玄益に学んだ。李東垣の医説を重視し、江戸中期の後世派の第一人者と称された。
 著書 牛山方考・牛山活套・婦人寿草・老人必用養草・小児必用記など

図 20

婦人寿草



- 1706年刊
- 仮名交じりの平易な文章で書かれ、一般向けの啓蒙書として書かれているが、千金方・婦人良方大全・女科証治準繩をはじめ多くの中国古典を引用して内容は高度である。
- 内容は求嗣・妊娠・臨産・産後まで及ぶ。

図 21

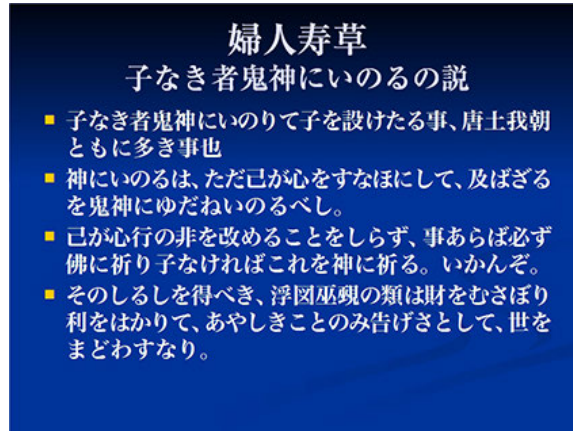


図 22

香月牛山が書いた『小児必用記』（図 23）は、小児の誕生から養育までの万端にわたって記述したもので、日本初の本格的な育児書とされています。絵が入っていて、一般の人が読んでわかるようになっています。



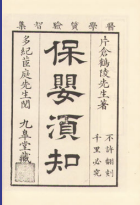
図 23

それから、片倉鶴陵（図 24）もおもしろい人ですね。ほぼ幕末に近い頃の人で、賀川流の産科術を学んだのですが、臨床を非常に重視しました。当時は蘭学も入ってきていたので、『産科發蒙』のなかに右に示すような図もありました。

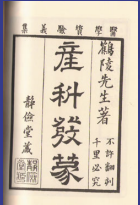
保嬰須知 産科發蒙

片倉鶴陵(1751-1822)


- 相模国築井の人、多紀元徳の学僕として躋寿館で医学を修めた。後に賀川流産科術を学ぶ。臨床を重視した。



保嬰須知



産科發蒙



オランダのディヘンテル産科書の引用図

図 24

現代の産科小児科の漢方治療

現代の一般的治療（図 25）については、明日のシンポジウムでも出てくると思いますが、いくつかお話させていただきます。

現代の一般的治療

- 不妊症
- 夜泣き
- 妊娠悪阻
- 産後乳汁不調
- 妊婦の精神不安
- 回乳
- 胎位異常
- 小児鍼

図 25

日本では不妊症については、寺師（睦宗）先生が有名です。当帰四逆加呉茱萸生姜湯，当帰芍薬散を投与することが多いそうです。中医学の教科書的な分類では，スライド（図 26）に示すようになっています。

不妊症

- 腎陽虚 毓麟珠 温腎丸 十全大補湯
- 腎陰虚 養精種玉湯 六味丸
- 肝鬱 開鬱種玉湯 四物湯+加味逍遙散
- 痰湿 啓宮丸 六君子湯+香蘇散
- 血瘀 少腹逐瘀湯 当歸芍薬散

図 26

最近では、みなさんご存知だと思いますが、「周期療法」(図 27)がよく使われています。

周期療法

	各期の特徴	治法
月経期	重陽転陰 陽が極まり陰に転ずる	理気活血
卵泡期	陰長陽消 陰が増加して陽が減少	養血
排卵期	陰長達重陰 増加した陰が極まる	補腎活血
黄体期	陽長陰消 陽が増加して陰が減少する	助陽

図 27

つわり(妊娠悪阻)(図 28)については、日本ではよく小半夏加茯苓湯が使われています。ついこの間も 1 人来られまして、小半夏加茯苓湯を服用したその日から、つわりが止まったという方もおられます。

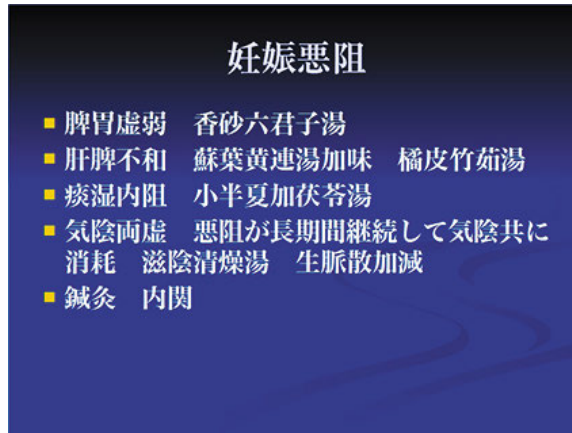


図 28

妊婦の精神不安を「子煩」(図 29)とといいます。スライドは中医学的な分類法です。



図 29

「胎位異常」(図 30)ですが、教科書的な弁証と処方スライドのようになっています。どれぐらいの有効性なのかよくわかっていません。鍼灸による胎位異常の治療できちんとした報告があって、三陰交の灸頭針治療で89.9%が正常位に戻ったと、1984年の『東邦医学会誌』で発表されています。これだけ戻ればいいなと思います。ちなみに、うちの子どもはお灸も鍼もさんざんやりましたが、とうとう戻らずに帝王切開になってしまいました。なにか子ども本人の都合があったのではないかと考えています。

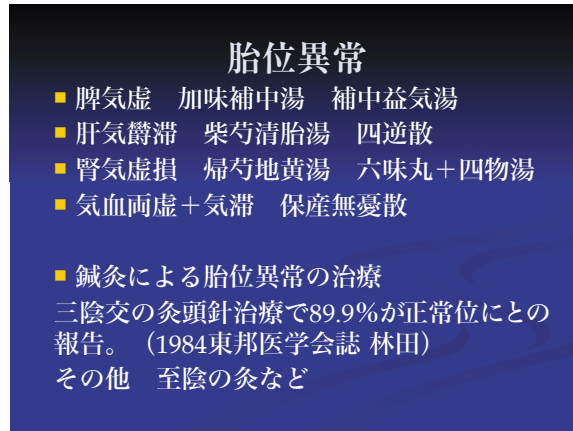


図 30

「夜泣き・夜啼」(図 31) に関しては、日本では抑肝散と甘麦大棗湯がよく用いられますが、うちの子は甘麦大棗湯を飲ませたその日から泣かなくなって、非常に助かりました。

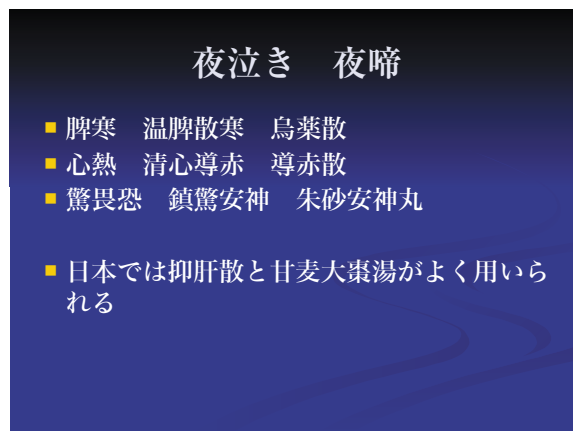


図 31

産後の乳汁不調(図 32) ですが、これは出てこないものもあるし、乳腺炎というのも困ります。うちの家内には通肝生乳湯を処方しました。おかげで母乳で育てることができました。

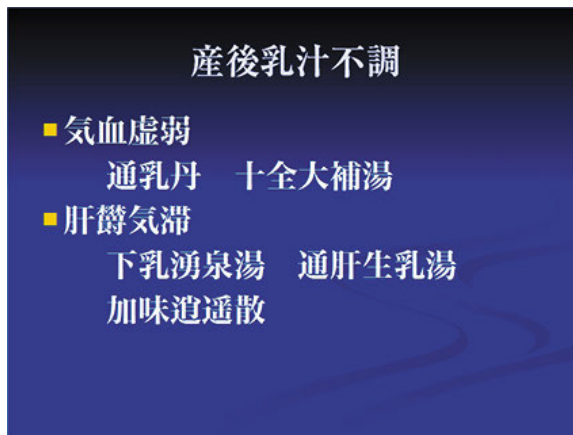


図 32

「乳癰（乳腺炎）」（図 33）も全体の 25% に発症するといわれています。すぐれた助産婦さんのマッサージが有効でした。乳腺炎を起こしたときは、托裏透膿散加減に近いような処方をつくって、なんとか切り抜けることができました。

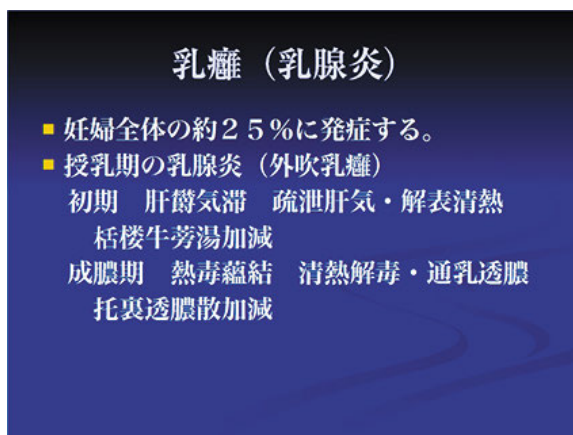


図 33

それから、産後いろいろな事情でお乳を止めないといけないことがあります。それを「回乳」（図 34）といいますけれども、麦芽を使って止まるといわれています。うちも飲んでみましたが、結果的に止まりました。そのほかに、「小児鍼」（図 35）というのが日本では特に関西で普及しています。これはほんとうに触るような感じの軽い刺激を行うもので、刺すのではなく鍣鍼ていしんを使いますが、これも、夜泣き・疳の虫・夜尿症をおもな治療対象として有効だといわれています。

回乳

- 産後授乳が出来ない事情があり乳汁分泌を停止させる方法
- 炒麦芽60gを500ccの水で煎じて内服

図 34

小児鍼

- 夜泣き・疳の虫・夜尿症を主な治療対象としている。
- 小児の皮膚に軽い接触刺激をおこなう 鍼を用いる
- 関西中心に普及している。

図 35

まとめ (図 36)

まとめ

- 少子化問題は世界的視点と地域的視点で考える必要がある。
- 古来より医療の中で産科・小児科は重要な分野であった。
- 日本においても主に江戸時代に産科・小児科医学が発展した。
- 中医学は少子化問題を解決する有効な手段の一つである。

図 36

まとめますと、少子化問題は世界的視点と地域的視点で考える必要があります。古来より医療のなかで、産科・小児科は重要な分野でありました。場合によっては、昔のお医者さんは支配階級の人を診ていたわけで、命がけだったと思います。うまくいかなければ打ち首にあったかもしれません。日本において、おもに江戸時代に産科・小児科が発展しています。中医学は少子化問題を解決する有効な手段の1つだと思います。

今回、明日のシンポジウムを含めまして、少子化問題に中医学が大いに貢献できるということを再認識して、広く臨床に応用していくことを期待しています。ありがとうございました。